

雜 纂

灰 屋 紹 益

文學士 江 馬 務

一 序 說

江戸時代初期に於ける富豪として、又和歌、國文、文藝評論、蹴鞠、茶道、音律、書道、園藝の名手として、また骨董蒐集家として、社交界の大立物として、殊に島原の前身六條三筋町の名妓吉野の落藉者としてその名聲噴々たりし灰屋紹益、即ち佐野三郎左衛門重孝の事蹟はこれまで多少世に紹介せられて居たが、それも零細な傳説に止まり詳細に涉つては何事も判明しなかつた。然るに

願れば大正六年山城應峰常照寺に於ける吉野の墳墓の改葬、同女の建立したと傳へらるゝ常照寺總門の再建、同女を記念すべき茶席遺芳庵の建築等の事業を遂行せんが爲め、同村森田清之助氏等の首唱によつて創立せられた吉野會より託せられて私が『名妓吉野』を編した時、紹益に關することも多少研究して同書に記述して置いた。が史料缺如只在來諸書に散見した事實を綜合して稍新説を加へ得た位の程度であつたから、若し其の子孫があればこれに就いて紹益の事蹟の研究の歩を進めて

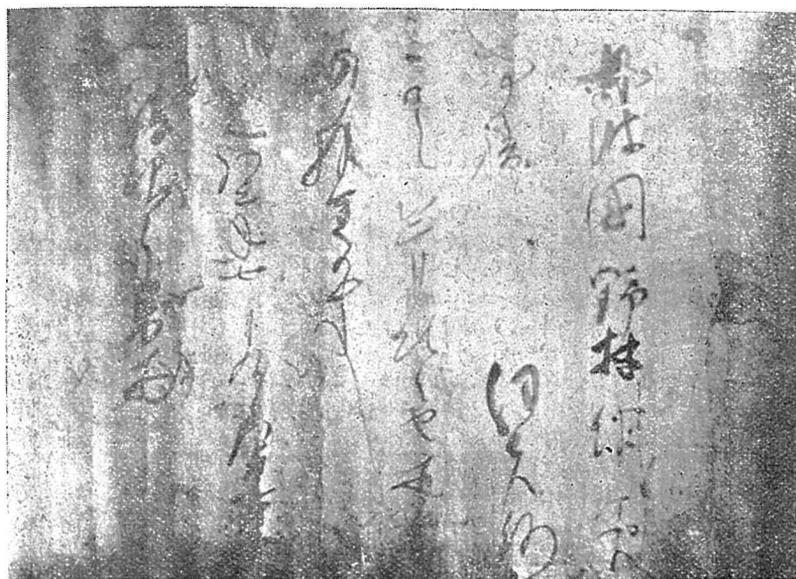
見たいと冀望して居た。然るに昨年冬であつた。

此拙著が縁となつて、端なくも紹益の後裔たる美濃海津郡西江村の佐野猪之助氏が突然私の宅を訪づられ、紹益に關する遺品文書は大分宅に所藏して居るから、一度調査に来て貰ひたいとのことであつた。私は實に意外の事に驚いたが、それよりも更に驚いたのは同氏は私の本家たる大垣の江馬家(細香女史の出た家)とは又親戚の間柄であつたことであつて、實に小説の如き奇縁といふの外はない。私はそれ故本年四月初旬に同家の客となつて、親しく紹益及びその祖先、その子孫に關する史料を調査することを得、その好意によつて學界未知の新事實を知了し得たものが實に尠くはなかつた。紹益はもとより當時の一個の風流韻士に過ぎないが、彼の生活如何は當時の世相の半面を窺ふよすがともなる事實が多いので、爰に本誌の餘白を借りて彼の事蹟を叙述することゝなつたの

である。

## 二 紹益の祖先

灰屋紹益の灰屋といふものは屋號で、姓は佐野灰屋といふは此の家の祖先が染料の紺灰の間職をしてゐた故で、佐野家に傳はる元弘三年七月九日本所某の袖判ある文書に據ると「丹波國野村紺灰間職事、任<sup>三</sup>先例<sup>二</sup>可<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>管領<sup>一</sup>之由所<sup>レ</sup>候也<sup>三</sup>」云々とあつて、宛名に孫次郎男所とある。この孫次郎と佐野家との關係は不明であるが、これが紺灰に關する文書の佐野家にある最古のものである。其後永和の頃には文書に據ると、佐野家に賀々女といふ婦人があつて、紺灰商人の組合頭となつてゐるが、その二年八月には、紺灰長坂口商人等の取締に關して左衛門尉利勝の奉書が下附せられて居る彼等商人が長坂口を越えて商業區域外で商業する時は盜灰に准じ、本人を嚴罰に處するとある。か



紺 問 職 安 堵 狀

ゝる下知狀はその後屢發せられてゐる。さて此の賀々女の祖先に就ては佐野家では槍一筋の武士であつたと傳へられて居る。足利尊氏の臣に佐野左衛門四郎氏綱といふ人がそれである。彼は高師直の軍に参加して、貞和四年正月五日四條畷の合戦に出陣し、後大和所々の合戦にも師直警固の役を承つて忠節を抽んでた功により軍忠狀を賜はつてゐる。この氏綱の子かと思はるゝ秀綱といふ人は又太郎四郎とも、新左衛門尉ともいひ、入道して道悟と稱した。氏綱と同じく足利家に忠節を盡した爲め、觀應元年七月尊氏から梅園六郎重綱の所領であつた下野國足利庄梅園村を領知せしめられた。當時南風久しく振はなかつた反動により、關東には勤王軍が勢威を挽回したが、秀綱は尊氏から觀應三年七月二十九日下野國松田城を攻むべき命を受けて居る。前には下野國に領地を賜はり、今又下野の官軍討伐の命に接してゐることから推



足利尊氏御教書

して佐野家は下野國の御家人であつたのであらう  
延文四年義詮が將軍となつた翌年十二月には義詮  
出陣の留守にその屋敷へ着到した十六人の武士の  
中に新左衛門といふ名が見えてゐる。貞治五年十  
二月二十二日には義詮は秀綱に越中國金山、澤保  
内清水島九郎の舊領、長澤保内圓覺寺村を領知す  
べく命じ、翌六年二月五日越中守護斯波義將は守  
護代伊豫守にそれ等の地を佐野秀綱代官に引渡さ  
しむべく命じて居る。

さて賀々女は應永十六年に娘ねへへ相續せしめ  
ねへの夫は長源で(俗名は判明しない)その子六郎  
左衛門(長榮)六郎左衛門の子彌三郎(榮秀)、彌三  
郎の子は三郎左衛門が嗣いだ。三郎左衛門といふ  
名は灰屋の通名で又烏帽子名は代々又三郎と呼ん  
だ(同家系圖)この三郎左衛門は重信といつた。當時  
長坂口の紺灰問職は上下京を通じて四ヶ所と定め  
られあつたが、他に問屋を名乗り、又應仁の亂に

紛れて濫りに同業を營み始めたものは皆糺明せられてゐた。佐野家は當時この問屋の一で、先規によつて本所役を免せられてゐる。永正十四年九月二十一日には紺灰座中の法度が發布された。すべて七ヶ條、その要綱を記して見れば、以前から賀々女流、村腰流、矢口流、冷泉院の四座があつて賀々女流の佐野又三郎と浦井新右衛門尉妻南女は本所より佐野を親分、浦井を子方とし座四流にして商賣人は五人と定められ、これより増減を許さざることとし、商人等が荷物を問屋に附せず、濫りに他所に於て商賣するを許さず、又問屋職を以て抵當とし、或は沽却するには本所の許可座衆の承諾を経ることを要し、之を子孫に譲るにも本所への手續を要し、商賣上面倒なる事件が起つた時は、之を本所へ申告し、更に幕府に通達しその下知を俟つて、本所にて取扱ふこととし、直訴などは一切ならぬ事、又その頃本所座衆參會の上互に

意志の疏通を計るなどいふことを規定せられてゐる。大永七年七月二十九日には立賣佐野家に對して軍勢の亂暴狼藉を働くこと、勢衆寄宿のこと、非分の課役を禁せられてゐるのは、當時の名家であつた證據であらう。(以上佐野家の文書による)

### 三 紹益の父紹由

紹益の父は紹由といふ。紹由は始め承由と記して居たやうで、紹巴の記した佐野家藏連歌の卷には承由とある。佐野家系譜の斷片に據ると、重信の子は又三郎重隆となつて居り、その後紹由迄が截れてゐる。京都市千本立本寺の佐野家の墓碑には中央から左へは、道悟、國貞、長信、加賀女、長源、長榮、榮秀、承信、承佐、了仲、曾酒、中央から右へは紹由、紹益及び一族の戒名があるから、承信(重信のことらしく、重信の釋名は宗信であるのが斯く記されたのらしい)の次は承佐、

(俗名重隆)でその次に了仲、曾酒の二代を経て紹由となつたものと見え、年代も略當つて居る。

紹由の代には世襲の業たる紺灰問屋は廢業してゐて、祖先の累代蓄積した莫大の財産で船橋附近(上立賣新町?)に廣大な邸宅を構へ、裕かな生活をしてゐたのである。紹益の著書『にぎはひ草』に紹由のことを、

世をわたるいとなみごとくもせず、ふかく連歌に心を染めて、紹巴法橋門弟にて、年久しく功をなしければ、堂上の御方々に交り、其比の連歌の懷紙にはもれざりし、

と記してゐる所を見ると、世をよそに風流の道を樂み、殊に連歌に熱心であつたのである。紹由の連歌の友には里村昌琢があつて、佐野家には昌琢宛紹由の手簡の幅がある。紹由は連歌のみならず茶道、蹴鞠、書道にも通達してゐたのは、紹益をして後世名を成さしめた素地を作つたものであ

る。

#### 四 灰屋紹益と文學

灰屋紹益は佐野重孝といひ、通稱は三郎左衛門烏帽子名は又三郎、紹益は其號である。三郎左衛門は諸書に三郎兵衛とあるが、これは誤で佐野家藏寛永十四年日暹筆曼陀羅にも三郎左衛門となつて居り、又紹益も承益とあるから、始めは承益と云つたのであらう。紹益は慶長十五年京都に生れ、紹由の養子との説もある。實父は本阿彌陀光益で、光益の祖父光利は光悅の父光二の弟であるから、光悅とは深い血縁の問柄である。(吉野傳)今も佐野家には光益作の茶筌と杓を大切に保管してゐるのは、此の説の真相を語るのかも知れぬ。光益は佐野家文書に據ると、古田織部の門弟で、茶道の達人であつたから、紹益は何れの方の血統を受けても、先天的に風雅の士とならざるを得な

い人であつた。その佐野家へ入籍したのは何歳の頃か不明であるが、幼年時代に貫はれたものなることは疑を容れない。彼は天性穎悟、幼より紹由の家庭教育、光悦の薰陶を受け、何事によらず趣味を以て臨み、常に研究的態度を怠らなかつた。されば彼の志した學藝は多方面で、而も彼は何れにも造詣頗る深いものがあつた。今彼の堪能であつた各方面を列擧して、彼が日常没頭してゐた趣味生活を窺はう。

(一) 和歌 和歌は夙に烏丸光廣、松永貞徳、飛鳥井雅章等に師事した。(にぎはひ草、吉野傳)併し彼の和歌に對する趣味は常に吟詠するのみではなく、汎く古今の歌集を讀破して能く咀嚼してゐたことで、上は萬葉、三代集を始め、俊成、定家西行、長明、兼好より頓河などに及び、博覽強記で、高い鑑賞眼や批評眼を備へてゐたらしい。而して歌道を目して單に高尚なる娛樂とのみ信せず

更にある深遠なる理由を詠誦研究の上に寓してゐたから、歌道の熱心は敢て人後に落ちなかつた。(にぎはひ草)

彼が歌道に就て一世の面目を施したのは、或る年八月十日月明の夜、八條宮智忠親王のおほした桂の御殿で、飛鳥井雅章雅直などの縉紳と共に歌會の席に連り、雅章卿の出題で寄月歌を詠じた時、紹益には寄月旅の題が當り、當座に

武藏野や草はみながら置露に

月をわけゆく秋の旅人

といふのを詠じた。後この歌を親王より後水尾院へ奏上せられたところ、院は置露にを置露のと易へよと仰せられた。(賑草)然るに紹益の孫塋庵が手記を携へて伴蒿蹊に記念の爲記事を乞ふたといふ佐野家の藏幅には院が月にわけゆくを月をと添削し給ひしことを記し、『賑草』の説と一致して居ないのは不審である。若し兩説を綜合すれば置露

に月にどの字が重なるから、これは何れか片方の説を取らねばならぬ。然らば『賑草』説の方が恐らく正確なのであらう。尙ほ月前時鳥といふ題で

明やすき空ものこりてほとゝぎす

聲のあとゆく夏の夜の月

といふのも叡覽に入つたといふ。後水尾院は公卿殿上人の吟詠は少しも綿密に御覽せられず、常に好んで紹益など地下の歌を御覽ありて御添削さへあらせられたと申すことである。(賑草)尙ほ彼が高風二三を録して見る。

明やすきうらみも(一本は)あらし我袖に

涼しさのこせ夏の夜の月

民を守る神にたのみをかけ筒の

たけにも千代の秋やちきらむ

この最後の歌は神竹の筒と銘ある插花の筒に金漆で書かれた歌で、その筒は今も佐野家に秘藏せられてゐる。彼の歌風は優婉、風調は流暢で、古に

泥まず、今に偏せず、凡人の企て及ばざる妙句に富んでゐて、當時の名流より一頭地を抽いた技術が見える。

(二) 俳諧 俳諧は松永貞徳に師事してゐた爲め多少吟じた様であるが、多く傳はらない。『賑草』の中に祖父五十回忌に千句を成就せんめむとしたことが見えて、次に

おごろけば五十年も夢かほとゝぎす

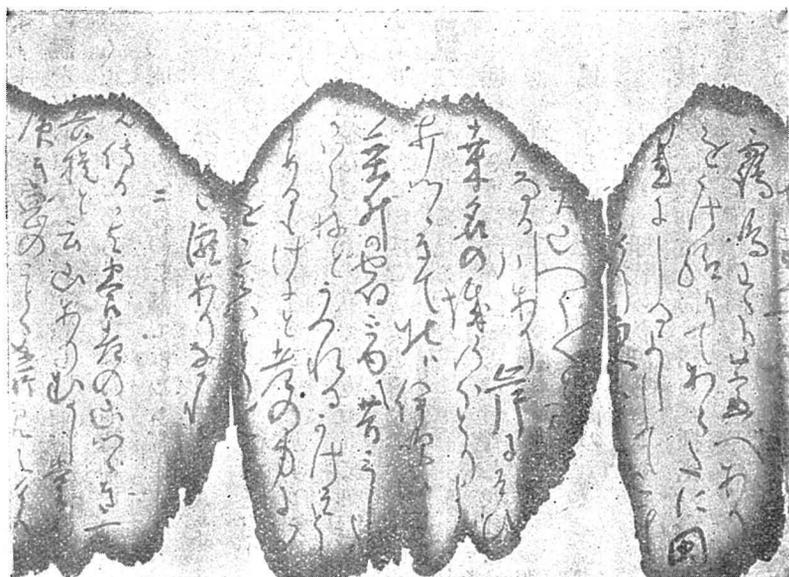
といふ句が唯一句傳はつて居るに過ぎぬ。

(三) 漢詩 詩人としての紹益も、餘りその作に接するごとが出来ぬ爲め、巧拙を辯することが出来ぬ。京都平井右平氏の藏短冊に立秋曉といふ題で、

風自西南聲不閑 曉來夢覺水潺湲

五更枕上葉飛後 天下初秋在樹間

といふのがあり、又佐野家にも詩の大幅を藏せられてゐたが、遺憾なことには最近京都市岡墨光堂



美濃本阿彌新田記(紹益自筆)

にて保管中火災に遭うて灰燼に歸した。

(四) 和文 紹益は文學家としては和歌と國文とに天才を發揮してゐる。彼は若年から枕草紙、徒然草を愛誦したらしく、殊に後者には文章に於て論旨に於て共鳴してゐた。彼が著『賑草』は徒然草を模して作つたもので、いたく兼好に私淑してゐた。(賑草)傳ふらく松永貞徳が嘗て三條通で徒然草を講じてゐると、一富豪がその雄辯に感じて土地を興へたと。(近世畸人傳)これ恐らく紹益であつたのであらう。

彼のものした美文の現存してゐるのは『賑草』や佐野家の美濃國領地に關する文、同和歌浦紀行文等であるが、今左に『賑草』の一節を抄録して參考としやう。

一耳したがふ頃もはるかに遠く過ぬれば、ことわりとはおもひ侍れども、あるにもすぎて、うぐひす時鳥のはつね待べき便もなし。春の朝

ほらけ、花のかさそふ風は、さすがにのどやか  
なるとはしりぬ。籬の内に來鳴鶯の聲にはやか  
なるに、おどいも時と聲打そへ給ふ。さきぐさ  
の末つかた、さぞあらんどおもひやられ侍るの  
みぞ、心のなぐさめにて、暮行そらにほとゝぎ  
すをきかざるは、いと口をしけれど、さにごそ  
と思ひなしても有なん。説法をきかず讀誦のこ  
ゑをきかざることこそ悲しき。

かく擬古文に於ては獨特の妙味を有して居る。

(五) 文學評論 彼が評論は又『賑ひ草』に徴す  
るより他に道がない。彼はその著で俊成、定家、  
西行長明、幽齋、頓阿などの歌を縦横に品隲し、  
又和歌に對する卓見を二三ならず叙してゐる。例  
へば心ある歌といふを論じて

こゝろ有體といふ事能々心得べき事也、風情の  
めづらしく興有てたくみいだしたるを、心あり  
とおもえり。さらにしからざる事也。風雲草木

の感につけても、また世間盛衰などにつけても  
おもひぬれたるを心あるとは申也。故戸部申さ  
れしは貫之が櫻ちる木の下風の歌風情をもしろ  
くめでたけれど、これを心有うたとは申さず  
遍照僧正出家の時めのとのもとへ、たらちねは  
かゝれどてしもうば玉の、是こそ心ある歌の本  
よと申されし也。これにてよく／＼心得べし。  
といふ類である。次に紹益と雜藝に次て縷述せう

## 五 紹益と雜藝

灰屋紹益は蹴鞠家として、茶人として、樂律家  
として、書家として、園藝家として、刀劍鑑賞家  
として骨董家として又千載不磨の名を成して居る  
(一) 蹴鞠 蹴鞠道は應仁の大亂後頓に衰頹し  
たが、幸に宗家飛鳥井、難波の兩家によつて纔か  
に命脈を維持せられ、當時之を習得したのは多く  
公卿で、地下の人の間には餘り行はれて居なかつ

たが、我紹益が地下で、而も數十年一日の如くこれを學んでゐたのは異數とするに足りるのである。彼は十二三歳から飛鳥井家の門弟となり、歳七十に餘るも未だ廢せず、彼が如何に巧者であつたことは斯道に於て容易に獲得し難い紫末濃袴を許可せられたことでも分る。(國花萬葉記)寛永十一年七月二十日將軍家光が二條城へ來た時、紹益は堂上家五人、地下三人の地下の一人として蹴鞠を上覽に供し、又寛文七年三月十五日には江戸城へ召されて將軍の御前一萬石以上の大名衆列座の場で飛鳥井、正親町以下七人の公卿と共に妙技を演じて大に面目を施した。(賑草)地下では紹益は斯道の本邦第一人者であつたのである。佐野家には鞠に關するものでは寫本が四種傳つてゐる中で、蹴鞠之口傳成通卿ら難波の家に相傳する百々條の事の本は紹益の手寫で、明曆三年十月に成つたものである。又光悅の揮毫した鞠扇は佐野家珍什の

一で、金泥に綠青群青などで松皮菱と芥子を畫き更に砂子を撒いた光悅獨特の妙技を發揮したものである。恐く光悅から紹益に贈つたものであらう。(二) 茶道 彼の日常最も嗜好してゐたのは茶道であつた。彼は金森宗和の門を窺ひ、又石州流の藤原宗源に従ひ奥旨を極めて居たが、(佐野文書)光悅と同じく必ずしも一流を固執せず、諸派の萃を抜き、一種の折衷派を自守してゐたらしい。彼は茶道を以て聖賢に近づく修養と觀じて居た。『賑草』に曰く、

茶湯道といふ事有。近き世よりいひ初めける道にて賢人聖人の教にあらずして、しかも聖賢の道にひとしく、佛道神道にも能通じぬべき道也(中略)茶湯は貴賤程につけつゝ人をもてなす事をもととして參會す。亭主となり客となるに、先身をきよめ、あかつかぬ物をえりいで、着し秘藏しもてる調度ども取出、目をよろこばしめ

思ふどころまた珍しき客なども寄合て、都鄙昔今の物語し、よきにはひせんとたきものす。山海に心をめぐらして何くれとしつらひてうじいで、我を忘れて餘念なく、人をもてなさんとおもふは、聖人の心にも近かるべし。

と口を極めて之を稱揚し、茶道の達人とならんには教外別傳の深遠幽玄な境地に進まねばならぬとて、『賑草』に一々懇切に之を論じて居る。されば彼に入門を乞ふ人々も多かつたらしく、現に佐野家には勝榮といへる人が、己の子を紹益に託して茶道の傳習を乞へる手簡も傳つて居る。紹益は日夜客を招き、松風の音に心を幽玄に馳せ、又秘藏の珍什を示して饗應することも屢あつた。川井宗信といふ人から、昨日は御茶被下殊名物の御道具拜見仕色々御馳走之段忝奉存候といふ様な禮狀も佐野家にある。

(三) 音律 樂人としての紹益は以上の諸藝に

比して稍その伎倆が疑はれる。唯『賑草』に零碎な管絃に關する見解が洩らされて居るのみである。

(四) 書道 書道は彼が幼少の時から本阿彌光悦に習つたと傳へられて居る。如何にも若年の書は光悦に私淑したかと覺しき筆致が生硬なる書風の中にほの見える。晩年に至つて、中古の公卿様を學んで、筆致圓熟閑雅の趣を備へて居る。抑光悦は當時近衛信尹公(三藐院)松花堂昭乗と共に三筆の一人であつたが、紹益は彼を目して、また世に有べき人間とは覺侍らずとまで稱揚してゐるのは單に筆道のみならず、その人格趣味などにも或る程度まで感化を享けてゐたかとも思はれる。紹益の書は佐野家には所藏品目録、和歌浦記行、詩幅、寫本等があるが、中には前述の如く最近に烏有に歸したのもある。

(五) 園藝 彼の園藝に興味と了解とを以てゐたことは茶室建築に伴つた自然的要求として得た

所であつて、之にも亦一種の意見を持してゐたらしく『賑草』にも茶湯の路次の石のことを論じてゐる節がある。

彼が以上の手腕の外に興味を有してゐたのは、風俗に關する方面と骨董とであつた。風俗の方面では『賑草』には刀脇差の反を直すことに就て辯じて居る一節がある。當時歩、若黨、鎗持の類は大男を用ふるので、従つてその刀の長さも長い。然るにそれに反がある刀は歩む姿が悪いといふので皆棒の様な反のないのを用ひ、反のあるのは反を直すことゝなつた。この風若い衆に及び、反のある刀は反つて下直であるので、態と反を入れて高く見せ改造せしめることまで起つたのは實に馬鹿氣たことである。彼もこれに關し、大に『賑草』に於て非難して居る。

悲しきかな、今新しく作るだに、古代のすがたにかはれるは、無下にいやしく成行といへるに

其作者の心にうる所ありて、打置けるを、しばらくの時のほやりごとにて、鎧持等のこのむ所にめうつり心うつりて、無下にいやしく成行にあらずや。(中略)略殊更此國に於てはあがめ貴むべき物なり。寶劔をはじめ奉りて、いにしへよりいづれの御社にも、名作をおさめをかる泰平安穩ならしむる其徳有成べし。萬々の鍛冶の中に名作など打いだしたるをば神ども祝ひ、其道々のともがらは一入貴むべきなり。此寸法に子細あり。此そりに魔障を拂ふ其理ありと云事なくて叶ふべからず。さあるを今なをす事また世に有まじき大罪也。まして當座の少のよくにふけりて、かゝるあやまりをなす事、口おしくつたなき、無下のひが事にあらずや。世のため後の世のため、かゝるたぐひの事またあらせじとはからひ了簡あらまほしくこそ侍れ。

紹益の意見として斯くまで痛快なのは外に見當ら

ない。彼は徹頭徹尾國粹保存主義を固持し、刀劔を以て本邦に於ては特に貴むべきものと看做して居り、目前の少利に目くれて無道を敢てする人々の多いのを慨嘆しそれ等の輩に痛罵を浴せかけてゐる所は嬉しい。思ふに此點に於ても、彼の私淑して居た光悅から得たことが多かつたらう。

彼は又骨董に就て深く趣味を有して居た。彼が素封家であつた爲め古今の骨董を蒐集し、又金子貸の抵當が流れて彼の所藏となつたものを集めて見ると中々夥しい點數に上つたのであつた。その目録が二通傳つて居るが、その後のものゝ中主要なのを抄録して見ると(圈點のは同家現存のもの)

- 一、三統超過御消息 一、中山日祐上人御本尊
- 一、日親上人三十番神 一、舊氏之御狀 一、太上法皇大二字御宸翰 一、伏見院御詠歌 一、後柏原院御懷紙 一、後鳥羽院、俊賴、爲家三筆 一、趙昌ひよ鳥 一、南堂 一、大燈國師

大二字 一、一山涅槃大二字 一、一山一軸

一、尾張大守御詠歌 一、同御繪讚 一、三菟

院殿古今の序 一、雪舟三幅對 一、相阿彌布袋の繪 一、探幽山水 一、鳥丸光廣卿詩歌

一、飛鳥井殿一位雅章卿八瀬ノ御詠歌 一、同

鞠繪の讚 一、應山公繪讚 一、雪舟繪讚 一、

利休の文、あさがほ 一、古田織部の文 一、

紹巴ノ文 一、昌琢紹由兩筆、定家色紙

その他この目録に洩れてゐて現に所藏の珍什は、

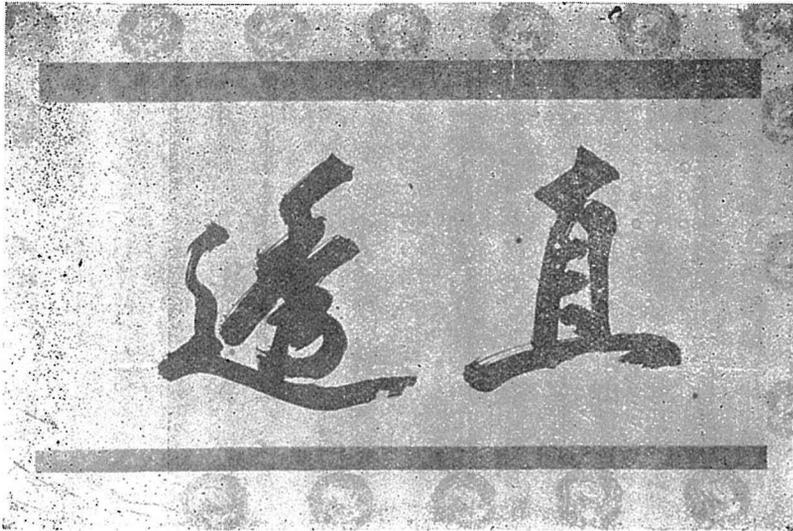
神鉢、蟹の盃臺、木庵書、紹益扇一對、紹益烟管

神竹筒、刀劔數振、本法寺古釜、吉野書、光悅書

光悅扇、古文書一卷で雜書類も多い。

\* \* \* \* \*

かく紹益の趣味は極めて廣汎で、而も天稟の才能によつて何れの方面にも精通してゐたのは感ずるに餘がある。併しこれも一は時勢の然らしめた所である。當時は人格を認めらるゝにも、又社交



後水尾天皇宸翰

上にも、或る程度まで多趣味多藝を必要としたらしく『慶長見聞集』に見えた江戸の木村才兵衛といふ人の口吻に

我人に交はり、なまじひに座席につらなるといへ共、萬無能故耻辱多し。あまつさへ伴にきらはれ無念至極也、今日より藝能まなぶべし。然ば十能七藝ありとかや、其中あまねく人の用ふる藝より習ひはじめん云々、

とあるのでも這般の消息を窺ふことが出来る。

## 六 紹益の社交

紹益は自己の廣い趣味の媒によつて、上は上皇の御知遇を蒙り、皇族、公卿、大名、學者、美術家、僧侶、茶人その他あらゆる階級の人々とも親交があつて、當時民間に於ける社交界の大立物の一人であつた。

それに就て特筆大書すべきは、畏くも後水尾上



木庵筆蹟

皇より御書を拜戴したことである。紹益は年六十に近くなつて耳が遠く、是迄の如く外へ出なかつたが、何時か上皇の御前で彼の噂が出た時、上皇は彼の趣味を左右へ御下問になつた。聖護院宮は日夕茶湯をすきて候ふと答へられたので、上皇はさらば掛物を下さるべしと仰せられ、直透の二大字を賜はつた。飛鳥井大納言も

直透之二字

法皇宸翰拜領之段、眉目之至誠可謂家珍者也

不宣

六月十一日

花押

法橋紹益

の祝詞を與へて居る。紹益自身も『賑草』にかしら上へくも不覺、感涙身にあまりてどいめがたし。(中略)いかなる事にかゝる忝き事どもにあひ奉る御代に生れ出けんと天を仰ぎ地を拜し、

とある位欣喜雀躍して、ひたすら上皇の寶算御長久を祈り奉つてゐた。彼はこの御書を表装するに上皇の御衣を以て一文字とし、雲龍御紋の裂を態々織らせて中とし、毎年元旦に床に掛けて御鴻恩を奉謝することゝした。この御軸は今も佐野家にあつて、古ながらに元旦に掛けられてゐる。只紹益はこの直透の意味を了解し得なかつた爲め、黄蘗木庵に傳を求めてその意の解説を乞ふたが、木庵は書して曰く、

太上法皇信筆書直透與君、別無他意、只要君知口只好吃飯、於是見其端的不妨是夢醒底漢子、如或未然切々用心囑々、

黄蘗木庵老僧

書示

青霄齋紹益彦士

これも佐野家に秘藏せられてゐる。所が紹益は又この木庵の手簡の意味が解らぬ爲め、智懂、慶峰

なごいへる僧に句讀返り點、意味の教示を乞ひ、中には「少禪門の修行を可被成候世間は無常のならひ人々早く死に歸する者にて御座候」といふ様な禪門修行を勸告した様な添状のある返答もあつたが結局了解を得たか如何か、今殘存の史料ではその邊までは分り兼ねる。是れ恰も上皇が紹益に謎をかけられた様なもので、紹益も之には大分困らされたものゝ、それでも彼一代に取つて絶大の名譽であつた。(八條宮、聖護院宮などの皇族の御寵遇を蒙つたのも、又彼が將軍御前で鞠を上覽に入れたのも、一世の面目ではあつたが)彼は又尾張大納言徳川光友に愛せられた。光友は、狩野探幽、松花堂に就いて書畫を學び、氣韻高き作品を出した人である。當時後西院天皇と近衛應山公と共に三蹟の譽があつた。紹益は光友に招かれて、饗應に預り、御話相手となつたこともある。或る時大納言より左の書を賜はつた。之も今は佐野家

の珍什の一となつてゐる。

志感悦のあまりに 當座

おもひきや時ぞきぬらししきしまの

たへなる道をつたふべきとは

二月日

花押

佐野紹益へ

公卿では飛鳥井雅章卿を始め、難波、正親町、平松、園家など、親昵の交際をした。學者では松永貞徳、烏丸光廣、藝術家では本阿彌光悦、僧侶では本満寺の日乾。日遠、日暹、日還、立本寺日忍など日蓮宗の人々とも交り、茶人では古田織部、藤村宗源、金森宗和、佐久間直勝なども昵近であつた、彼は茶道を以て交際の手段とした位交際を好んでゐたから、その社交の範圍も極めて廣く各階級の人を網羅したやうである。

## 七 紹益の信仰と性格

彼は神佛を信仰し、佛教では日蓮宗を篤く信じて居た。貞享四年賀茂別雷神社に大乗妙典壹部を奉納した。その請取の文書は今も同家に保存せられてゐる。

請文之事

大乗妙典 壹部 白地金泥一部八卷

右奉納

當社別雷神太神宮御讀經所也、

故收衆中之寶藏令爲累代之珍者歟、仍請文如件、

賀茂社僧

貞享四丁卯年七月廿七日

見性房

安養院

養光房

佐野法橋紹益老

彼が佛教に對する信仰は『賑草』に

我若年より七十歳にあまる迄、法華經五種の修行の内解説は俗身なれば成難し、四種は數十年

一日もおこたらず、此功德を以て現世には先報  
恩謝徳の事、和歌の道に冥加あらせ給へと申け  
る。我いさゝか智なく、徳なく功もなし。信あ  
れば徳有とは此事にやと覺侍る也。

ごあつて、佛敎の信仰を以て徳と考へ、この信念  
を以て歌道の冥護を欣求してゐた所は、少しく一  
般人士と見地を異にしてゐる。

彼は日蓮の高僧と親しみ、殊に日重の和語抄を  
愛讀し、又日乾の説法を喜んで屢聽聞し、妙顯寺  
には寛文六年先住の碑を建てた。日乾上人は寛永  
四年に鷹峰に光悦の盡力によつて談林を遡めて常  
照寺といひ、門生を敎授した。讀經辯説共に連聲  
開合一語違はず長時に渉るも倦まず、聲梁塵を動  
かし、頗る高德の僧で、日重、日蓮と共に日蓮宗  
中興の三師といふ。(吉野傳、草山集、本化別頭佛  
祖統記、賑草)彼はいたく日乾に敬服してゐたが、  
正妻徳子(吉野)も廓にある頃から大に信仰して、

獨力常照寺に總門を建立寄進した程であつた。

彼は尊王の志の篤く、又故實を重んじ、國粹保  
存を絶叫したこと前に述べた通であるが、併し  
ながら世の故實家の如く頑固一徹の融通の利かな  
いのでなく、『賑草』にも引ける如く、源氏物語筈  
木卷の今めかしきにめうつりてをかしきも有とい  
ふのにも亦一理ありとして、その著に大に同意を  
表して居る。唯古から定まつた調度などを何の意  
もなく濫りに當世風とするの陋を笑つてゐる點は  
例の國粹保存の精神から來てゐるのであらう。而  
して徒然草の「何事もふるき世のみぞしたはしき  
今やうは無下にいやしくこそ成ゆくめれ」といふ  
にも共鳴してゐる。(賑草)

紹益は又世の名利には非常に冷淡で、その人格  
は實に大空の眞澄の月の如く高潔であつた。され  
ばこそ『賑草』にも西行法師の高徳に感じ、又二三  
の隱遁者の例を擧げて大に同情を捧げてゐる。紹

益が住吉社の社司の佛事に行つた時、多くの乞食に紛れて、一人の薙の破れたのを腰に巻き、鈴を振つてゐた乞食があつたが、これぞ大宮大相國伊道の末子尊惠僧正の遺弟天台山の靜圓供奉であつた。又宗圓といふ素性も分らぬ乞食があつて、毎

日極寒でも加茂川の水に浴し、朝日を拜し、清水の觀音に日參し、肩や腰を物で蔽ひ長い杖を持ち常に己の鼻を見て人の門に立たず、極寒に衾を與へても之を人に譲り、路上の物は一切捨はぬ無欲淡泊の生活をして居た。紹益はこの兩人を共に岸の額に根を放たれた草、江の畔につながぬ船に比し、無常の風の吹かぬ先に落つべき方をこしらへてゐる貴き心であると同情して居る。而して彼はこの名利に憧憬せる俗世間に生きざる可からざるを慨き、かくは幾多の趣味に隠れて不快を慰めてゐたやうである。されば彼は金銀を以て絶対に重寶なものとは観じて居らぬ。殊に汲々として蓄財

して之を樂としてゐる人の愚を冷笑してゐる。彼が蓄財をするならば、寧ろ骨董に易へて樂むべしと論じてゐるのは亦一見識に外ならぬ。彼はこの理想によつて財産を漸次骨董に易へて行つたのである。

最後に述ぶべきは、彼が徒然草に見えてゐる妻といふものこそをのこ持まじきものなれとあることを論じてゐる『賑草』の一節である。紹益に據ると、この説は一旦人倫の本を忘却し家法を知らぬとて兼好を駁する人もあるが、この兼好の見解は格別の世界に示したことで、天下に示した教ではない。同じ徒然草に酒の戒を記して置きながら、又酒の興あることを別に記し、自家撞着に陥つてゐるのと一般である。恰も秋の月を面白いとて夜すがら眺めあかし、起きてゐるべき晝に寝る人と同様である。花を植えるより菜を植ゑよといふ道理も之に當ると論結してゐる。終りに今一つ彼の

心境を説いてゐる『賑草』の一説を紹介せう。彼は世にまじはりて心世にまじはらず、一物に心をのこしとやめず。（中略）かゝる心もたらんはきよくすしからましと云つてゐる。即ち彼は世を不則不離に處する所に、彼の方寸を求めて居るので、隱遁するに非ず、俗裏に没入するに非ず、何等の執着をなさずして、仙聖の心を以て市に隠れしものと觀せられるのである。

彼は晩年に斯く悟入してゐるが、それでも若年血氣の頃には、晩年の極めて眞摯嚴格なる方面に反して、至つて粹な艶つばい裏面があつたのである。

## 八 紹益と吉野

紹益と吉野のことは拙著『名妓吉野』や『晝夜帯』卷二に詳細に記して置いたから、爰では省略し、唯その輪廓だけを記すに止めて置く。當時島原廓

の前身六條三筋町下の町の扇屋林與次兵衛方の太夫二代吉野は素性は賤しからぬ浪人の女で、容顏艷麗、和歌、連歌、書道、琴、琵琶、笙、茶道、香道、插花、貝覆、碁の名人であつて、その名は海外にまで聞えて居たので、假令高位高官富豪と雖も、自ら好まぬものは面會すらせなかつた位である。ある鍛冶屋の弟子が一度の面會の叶ふた翌日桂川へ沈んで一命を隕したといふのも、朝に吉野に會へば夕に死するも可なりと思つたからであらう。紹益は夙に吉野と相思の間柄となり、寛永八年妻を先だてた年の八月十日二千金で落籍させ、同棲十二年、寛永二十年八月二十五日に又吉野を白玉樓中に委した。彼は茶毘の骨灰を飲んで手向の歌を詠じた。

都をば花なき里となしにけり

吉野を死出の山にうつして

その遺骸は日乾上人開基の鷹峰常照寺に葬つた。

吉野の遺物には光悦から紹益へ、紹益から吉野へ贈つた蟹の盃臺がある。(詳細は最近の『民族と歴史』に譲る)實に天下の奇寶と謂ふべきで、現に佐野家の秘藏である。尙佐野家の分家慶松氏にも同様のものがある由であるがこれは稍疑ふ可き點もないではない。吉野の帶にした裂は吉野廣東といつて名物裂となり、その發明した茶室の丸窓は吉野窓といつて、共に有名である。吉野の筆蹟は世に多く傳つてゐるが、吉野といふ名は七代もある爲め、何れが二代の書であるか判明しなかつた所佐野家にあるのでそれが明瞭になつた。同家のは

吉野

いけるならひとや

ものを思はずぐる人も

なきには候へどもわけてくるしき

我心しんそ人こそしらねよかしかしく

といふので、流麗優雅の書風である。

## 九 晩年の紹益

明暦二年五月二日に法橋の宣旨があつた。吉野と別れて後快々として樂まず、久しく空聞を守つてゐたが後、大阪より小堀氏を娶つた。然るに天和二年妾某に男子が生れた。それが紹圓である。

紹益は金錢に冷膽であつた爲め、大名其他に金子を貸したのが貸し倒れになつのも随分多かつた様である。その證據して佐野家には多數の證文を藏してゐる。又抵當として残つた骨董品も中々多かつたらしい。その一例を擧げると、寛文二年寺田正哲は寧一山、玉舟和尚の懸物を抵當として、一ヶ月二十三匁五分八厘の利息で二貫三百五十八匁を借用してゐる。目錄に一山の軸があるのはこれかもしれない。かくして當時の富豪にあり勝であつたやうに、彼の晩年には莫大の財産を漸く減じて行つた。併し彼は後顧の憂なき爲め、慶安二年

美濃石津郡福江村沼草野新田に田地を買つて置いた。これが今の子孫の住地となつて居る。

彼は老いて益嬰鑠として茶鞠和歌などを樂み、

『脈草』等を草するなど元氣尙ほ旺盛であつたが、

元祿四年十一月十二日、齡八十二歳で歿し、京都

立本寺に葬られた。古繼院紹益日今はその釋名で

ある。(佐野家位牌による)立本寺は始め四條櫛司

にあつたが、後移轉して寺町今出川に至り、寶永

五年七月現今の七本松中立賣に移つたものである

紹益の墓は著作堂一夕話には

古繼院紹益 元祿四年十一月十二日

本融院妙供 寛永八年六月二十二日

とあると記して居るが、現今はこの墓は見えない

七字の題目の右は道悟以下曾酒までの戒名を列彫

し、左は

自得院紹由日糺

元和八年  
三月二十六日

古繼院紹益日今

元祿四年  
十一月十二日

尊知日口慈

玉澤日善上人 智雲院日龍

本法院□□□□

圓具院妙津日城

信受院妙法日行

□□□□□□

慈眼院妙親日宗

とあり、幅二尺縦二尺の花崗岩に大きな笠石を載

せてゐる。これは元の墓と變更せられてゐるので

あらう。立本寺の過去帳には

元祿四辛未十一月十二日 八十二歳

古繼院紹益日吟 美濃國石津郡本阿彌新田佐野

善七

元祿七甲戌五月十二日 六十一歳

信受院妙法日行 佐野紹益内室

元祿十一戊寅八月七日 三十四歳

信行院妙仙日長

隱岐宰相殿妻 紹益養女

元祿十四年辛巳十二月三日

六十五歳

圓具院妙津日城 佐野蓮蓋姉

とある。これで日行は小堀氏のことなることが知られ、前の妙供は吉野の先妻と知らるゝ。尙ほ附近には寶曆三年に歿した紹圓と、紹圓の子塾庵の墓もある。塾庵は兩替町二條に住して醫を業とし、文學に長じてゐた。この頃佐野家は大に零落してゐたけれども彼は清貧に安んじ、家に蟹の盃あること位は吹聴したものの、他の什物は世間に秘めてゐたのらしい。(著作堂一夕話)文化五年に塾庵歿しその義子彬家を嗣ぎ遂に曾祖父の求めて置いた美濃の地に移つたがこれから代々農に歸して善七の通名を肩して一向宗信者となつて居つた。彬の子善七(釋靜心)はその孫善七(紹胤)曾孫善七(釋昌)を経て、當主猪之助氏が相續して居られる氏は半世を土地開墾に盡され、今や大地主として再び佐野家を中興し、明年三月を期して邸前に八角堂の祖廟を建立し、その附近には荒廢した自家

經營の寺堂を毀つて村の公會堂を作り、小作人等に精神修養の講話を聞かせる場所とせん企がある紹益も亦以て瞑すべしである。

紹益の遺跡として京都市上立賣新町にあつた邸は頗る敷奇を凝したものであつたが、後高松の悉皆商吉岡氏の手歸して室町丸太町に移され、明治十一年天野方達之を購つた。後丸太町擴張の時取り毀たれ、その一部は今も丸太町室町角の天野氏の二階に残つてゐるので、同家藏の與次郎作擬寶珠張付等は佐野家に譲らるゝことゝ内定してゐる。又小川元誓願寺の邸は駒澤理齋氏が購ひ、後又骨董商土橋嘉兵衛氏に譲られ、その一部は高臺寺鬼瓦茶室となり、他の一部は岡林院の遺芳庵となつてゐる。

十 結 語

紹益は上述の如く敷奇なる生涯を送り、その生

活は經濟上何等の拘束もなかつたのと、天性情の人であつた爲めに徹頭徹尾文藝と信仰と傳奇ロマンに終始してゐる。今江戸時代初期に於ける富豪といふものを列擧すれば、音に名高い江戸の石川六兵衛紀伊國屋文左衛門、奈良屋茂左衛門、淀屋辰五郎中村内藏介、茨木屋幸齋、大黒屋九左衛門など、その數は頗る多いのであるけれども、これ等の人々は何れも人品も劣り、趣味も低級であつて、學問才藝なく、唯徒らに流連荒亡の樂に耽溺し、驕奢僭上の生活を街ひ、金銀を土芥の如く費消するを以て得々としてゐた様であるが、それ等の人々に比すると我が紹益の心事生活は誠に高潔なものであつて、富豪社會中の一異彩とするに足るものであると謂はねばならぬ。

從來江戸時代初期町人の生活に關する研究は、その完全したものが世に餘り多く表れて居ないので遺憾としてゐたが、偶灰屋紹益に關する調査が

爰に一段落を告げた爲め、記して江戸時代初期風俗史に側面的研究の史料を提供した次第である。

附言 本稿を書するに當り、紹益の祖先に關する文書に就ては文學博士三浦周行先生の高教を煩はしたことが多く、尙ほこの草稿の檢閲補正をさへ仰いだので、爰に先生に對して厚く謝意を表する。尙ほ紹益の事蹟に關しては最近私の主筆してゐる風俗研究會の機關雜誌『晝夜帶』第二號にも幾分を掲載し、又本年末には佐野家の懇請により、山田雲艸堂より『灰屋紹益と吉野太夫』全一冊出版することゝなつてゐるから、併せ讀まれんことを望む。紹益と吉野との關係は本篇には極めて省略したので、これも拙著『名妓吉野』や前記の拙著によつて緋讀を請ふ次第である。(大正一〇、八、二三)